

社会的役割と役割の規定

坪 井 健

はじめに

役割 (role) は、社会と個人の存在を可能にし、役割の在り方は、社会と個人の関係様式を示す。従って、社会の構造的状況の実態は、個人の役割関与の在り方にリンクしており、個人の役割取得 (role taking) ないし役割行動 (role behavior) の分析は、社会の関連構造のダイナミズムを明らかにするのに有用であるばかりでなく、疎外や物象化の状況を把握するのに有用でもある。

生活体としての個人が、社会関係を取り結ぶ場合、それを媒介しているのは役割である。

生活体——①——役割——②——社会関係

これまでの役割分析のアプローチは、大別して2つに分けられる¹⁾が、その1つ、広義の構造機能分析を支持する人々、R. Linton から始まり T. Parsons, R. K. Merton, R. Dahrendorf らは、②の局面から主として役割の概念化を試みた。特に Parsons の AGIL 図式²⁾は、この局面での役割体系化の試みであると言える。この局面での役割は、主として役割期待 (role expectation) の概念化であり、生活体としての個人に対しては、規範的期待への単純な同調又は選択的同調が求められることになる。

もう1つのアプローチである G. H. Mead の系列に連なる人々、いわゆるシンボリック相互作用論を支持する人々は、行為者の立場から役割の概念化を試み、特に R. H. Turner においては役割形成 (role making) 論を開拓す

る³⁾。これは生活体と役割の局面を重視する視点であり、①の局面での主として役割取得の概念化であると言える。しかし、役割取得の体系化の試みは、役割期待のそれのように十分な成果を今だ積んでいない。

生活体としての個人は、行為者として社会に参加する。その際、役割が社会関係のネットワーク上の位置（position）からの規範的期待の束としてたち現われ、行為者としての個人はただ「社会的に前もって形成されている役割の担い手」⁴⁾として登場する場合、その役割は社会的に規定された役割となり、行為者との関係でのみずみずしさは失われ、生活体としての個人にとっては、まるで「別の世界」から生み出された単なる義務の体系のように、その個人にとってよそよそしく「腹立たしい事実」⁵⁾として体験されるかもしれない。

このような役割取得は、明らかに役割の社会的規定性への全面的服従から生み出されるものであり、役割の物象化された見方を可能にする。反対に、生活体としての個人が、役割の形成に分ち難く関与し、それに基づいて社会関係を取り結ぶ場合には、役割はその創発的な（emergent）な性格を保持し、生き生きしたものになるであろう。

現代社会状況における役割分析の1つの焦点は、生活体としての個人の行為が、社会関係の総体の中でどのように発露されているかを折出することである。つまり、「行為」Verhalten < 『役割』 Rolle = 『社会関係』 Verhältnisse という基軸に支えられているか、それとも『行為』 = 『役割』 < 『社会関係』というそれによって支えられているか⁶⁾を明らかにすることである。

以上のような認識に基づいて、以下、生活体としての個人が行為者として役割に参加する側面と、社会関係のネットワーク上の位置から規範的期待の束として役割がたち現われる側面の両面を視野に入れて、役割並びに社会的役割と役割の規定について、単一役割の構成に限定しながら、若干の予備的考察を具体例をまじえながら行なってみよう。

1. 役割と社会的役割

役割概念は、社会学や人類学の領域でより多く使われている用語であるが、森好夫が述べているように「日常生活の中にある人間は、……自らを社会的に『……としてある存在』として考え、そしてこの『……としてある』ことの中に他の『……としてある』人間に対する *verhalten* の指向を求め、後者との間に一定の *Verhältnis* (すなわち役割関係) を形成している者として、自らを理解しているのであり、社会生活を営む諸個人は、その中で彼の受け持つ仕事や職務、資格や責任に応じて分類され、その分類された「役割名称」(role name) を持っている。これが日常的に見られる役割である。その意味で役割は一種の人間類型(より正しくは行為者の類型)と見なし得るが、それは具体的な行動と関連しており、一定の行動ないし行動特性が役割を表現している。

それでは、どのように特定化された行動ないし行動特性が役割を表現しているか。それには、多くの観点があるが、一応ここでは S. F. Nadel の所説が当面の参考になろう。彼は「役割概念を基本的には類型概念ないし部類概念」⁹⁾ として考え、それが社会学的意義を有するような集合体範疇にまで限定するとして、次の4つの特定化を行なっている⁹⁾。

- (1) 定義上、役割概念は行動ないし示差的な行動、およびそのような行動によって構成される特性に関連している。
- (2) 社会学的的に意義ある行動はつねに他者に向けられた、あるいは他者にかかわる行動である。
- (3) 社会学的に意義ある行動は、つねに目的的である。同様に反復的、再現的でなんらかの程度の「恒常性」をもっている。
- (4) 最後に部類概念は、それぞれの個人がたんにひとつの特性あるいは属性だけを含むことが必要とされているのに対し、役割概念は一連の相互に関連しあつた諸特性の出現が必要とされる。

この第4の特定化は、若干の説明を補足しておきたい。Nadel は、役割概念が部類概念のように1つの分類基準で充足されるのではなく、役割概念には一連の行動系列が求められるという。例えば「司祭」は、部類概念では「宗教的儀式を司る人達」と言えば十分であるが、役割概念では「ある程度の年齢に

達した人で、礼儀正しい生活をおくることや、高い身分を享受し、おそらくは結婚をしないといったことが期待されていることを意味している」¹⁰⁾もちろん系列化される内容が、社会文化的脈絡によって異なったものになることは言うまでもない。

Nadel は、社会構造を分析するための第一段階として役割概念を導入したのであるが¹¹⁾、ここに示された4つの特定化は、社会構造の基本単位としての彼の役割概念を支持しない立場の者にとっても基本的に承認されるべきものであろう。つまり、ここでは①役割の行動特性への依存的性格、②役割の他者関連的性格、③役割の目的性、反復性、予測可能性、そしてある程度の恒常的性格、④役割の連鎖的性格が明らかにされている。

役割は具体的な行動を通して観察され表現される。従って、役割が行動に依存していることは明白であろう。しかし、役割を表現する行動は、ある種の類型化された行動であり、観察者にとって示差的な行動でなければならない。また、そのような行動で構成された特性を備えたものでなければならない。役割に表現される行動は抽象的なものである。このような抽象化は、具体的な行動の中から独特な行動を抽出する時必ず伴うものである。この独特な行動の抽出のためには、必然的に他方で類型化が行なわれなければならない¹²⁾ので、類型化こそ行動判断の基礎をなすと言えよう。

役割分析は、いずれのアプローチを取るにせよ、社会的脈絡を全く無視したのでは意味をなさない。社会構造上に位置づけられる役割であれ、個人が表現する役割であれ、それは常に他者を想定したものである。それが直接的に他者と行為の交換をしている場面でなくとも、例えば、アトリエで創作活動に熱中する画家の役割であっても、他者の存在は前提であるし、そのような社会的脈絡の中でこそ、画家の役割を特定しうる。従って、役割を表現する行動は、時間的ズレがあるにしても、何らかの程度他者にかかわる行動であり、他者に向けられた行動である。

役割を表現する行動について語る時、それらが選択的知覚や選択的強化を示すのでない限り、有意味ではない。役割に表現される行動には、能動的側面と

受動的側面があるが、いずれの側面にしても人々の意図がそこに関与するような行動でなければ、社会学的には意義ある行動とは見なされない。役割を表現する行動が、意図的であり目的的性格を有するものであっても、一回起的行動では役割行動の部類には属さない。ある程度一貫した行動であり、関連する他者がある程度その個人がどういう行動をするか予測可能なものでなければならぬ。そのような行動は時間的経過と共に何らかの程度「恒常性」を有するようになる。だが、これらの条件はいずれも程度の問題であり、具体的にどの程度かは自他の相互作用過程の中で確立されるものである。

役割を表現している行動ないし行動特性は、これらに先の一連の系列化された行動特性という特定化を加えれば、当面必要最少限度充足されるであろう。一般に規範的性格を強調する傾向がある¹⁴⁾が、規範 (norm) が社会的拘束や強制を示す行為の準則又は役割義務のように解されると、社会的規範 (social norm) の強調になり、役割は再び役割期待の側面を強調した概念化になる。規範的性格の強調は、社会的規範と個人的規範の接点を可能にするような最少限度の反復可能性、予測可能性、そして恒常性に求めるべきであろう。ここに示された特定化された行動パターンは、類型化された行動パターンであり、その類型化自体、分類基準を前提として有していることを示しており、抽象化、一般化の操作によって標準化され、規則性を有する。この標準化され規則性を有する行動パターンの反復的性格は、必然的に他者にとって予測可能なものとなり、予測可能でかつ恒常的性格は、それ自体、役割の規範的要素の根拠を用意している。但し、制度化された役割 (社会的役割) においては、この規範的要素が占める位置は重要である。社会的役割 (social role) で規範的性格が重規されるのは、同一部類に属する後に続く不特定の個人にも期待されるような役割の自立化が求められるからである。役割が特定の行為者への準拠から自立化するメカニズムは、役割制度化のメカニズムとして、P. L. Berger & T. Luckmann の考察が参考になる。彼らは制度化の起源を行為の習慣化 (habitualization) に求め、「制度化は習慣化された行為が行為者のタイプによって相互に類型化されるとき、常に発生する」¹⁵⁾と言う。制度はまた歴史性と統

制を意味しており、行為の相互類型化は共有された歴史過程のなかで形成される。制度はそれが存在するという事実によっても行動を規制するが、歴史性という性格によって、制度は客観性という性格を得る。客観性 (objectivity) は第3者の出現によって強化され、ここに制度化が完成する¹⁶⁾。

このような制度化された役割は、社会的役割として論じなければならない。Dahrendorf が示した3つのメルクマールによる特徴づけは、このような社会的役割の諸特徴である¹⁷⁾。

- (1) 社会的役割は、地位と同じく行為規定の準一客観的で、個人から基本的に独立した複合体である。
- (2) 社会的役割に特有の内容は、ある個人によってではなく、社会によって規定され、あるいは変えられもする。
- (3) 役割に束ねられた行為期待は、ある要求義務をもって個人に遭遇する。その結果、行為期待から逃れようとするばあいには、彼はかならず不利益をこうむる。

ここでは、社会的役割の外在性、社会的規定性、義務期待とサンクションがその特徴として示されている。このような役割は、確かに行為者としての個人にとっては社会の腹立たしい事実と言えよう。しかし、このような特徴を持つもののみ役割概念に含めるとすると、役割の形成に生活体としての個人は全く参与することが出来ないし、「社会は人間の産物である」¹⁷⁾という Berger & Luckmann による社会的世界を特徴づける契機の一つを捨象してしまうことになる。このように客体化された役割概念は、Dahrendorf が「社会的役割」として取り扱ったように、純粹な意味での役割概念とは区別して考えたい。Dahrendorf の社会的役割の把握の仕方は、社会的に規定された役割 (期待) の重視にあり、ある意味で Linton-Parsons の構造論的アプローチの1つの極に位置するものと見なすことが出来る。しかし、現実の役割を構成する際、このような特徴を有する社会的規定性の側面は、個人的規定性の側面と共に重要な要素になることを見落すことは許されないであろう。

2. 規定性の2つの契機

役割の構成に関与する2つの規定因（群）は、事実としての行動様式を役割と見なす当然の帰結である。しかし、役割を構成する際どの程度両規定性が関与するかは、一概に論ずることは出来ない。具体的には必ずしも一様ではなく、多くのバリエーションがある。T. Newcomb の図式¹⁹⁾を参考にして、最も単純化した模式図を描くとすれば、図Iのように考えられる。

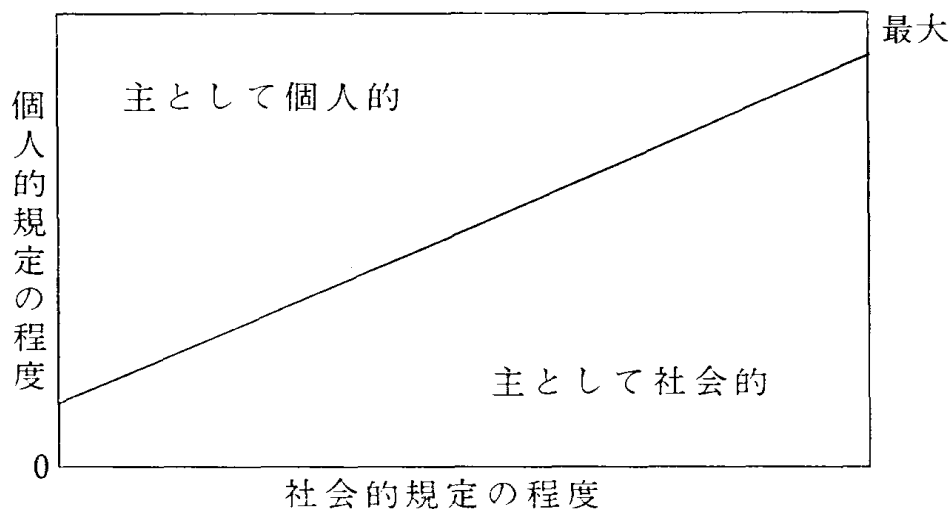


図1 (Newcomb et. al. 古畑訳「社会心理学」岩波書店 1973. p374 より)

役割行動のほとんど全てが、社会的に規定されている場合は、個人的に規定し直すことはほとんど不可能である。又、そのような再規定を個人が行なおうとした場合、もはやその行動は役割の許容範囲を逸脱し、役割の放棄につながる。役割の逸脱に対しては、当然社会の側からのサンクションが加わることは言うまでもない。例えば、観閲式における軍隊の行進は、行動レベルでのほとんど全面的な同調が期待され、その行動の様式は手のあげ方、銃の持ち方、足のあげ方、顔のあげ方のほとんどが社会的に前もって規定され標準化されている。その規定された行動様式以外の方法で行進することは、その社会的脈絡においては明らかに逸脱であり、その程度に応じて役割の放棄と見なされる。

しかし、他方では、役割行動の仕方がほとんどすべて個人的規定にまかされており、社会的規定される領域がわずかしかない場合がある。例えば、芸術家の役割には、人々を感動させるような芸術作品を創作することは期待されてい

ても、その創作活動の具体的方法は、社会的にほとんど規定されていない。創作活動の具体的方法は、それ自体が芸術家個人の才能や技術に負っており、自己の能力や知識を動員して、いかに創造的な作品を仕上げるかは、彼自身の選択による。従って、役割行動の時間的空間的規定がほとんど含まれておらず、極論すれば、それが創作活動の一貫として見なし得るすべての行動が役割行動と考えることが出来る。例えば、画家がアトリエのソファの上で寝ころんでタバコをふかしていても、作曲家が、浜辺で夕日を眺めていても、それが創作活動の一貫として見なし得るような目的的な行動であれば、役割行動と考えて差しつかえない。但し、それが関連する他者に表示され、認識されるものでなければならぬのは当然である。

社会的事実としての役割は、このような2つの規定因（群）によって構成されている。役割は、具体的な行動として表現されるが、すべての行動が役割を構成するのではなく、特定化された行動特性が役割を構成することは先に見た通りである。その4つの特定化された行動ないし行動特性は、何らかの認識可能な一貫性基準に合致した行動で、関連する他者に表示され、役割の表現として判断される行動でなければならぬ。その一貫性基準は、行為者自身の自己一貫性の基準と関連する他者から期待される状況からの一貫性の基準の2つの基準が存在する。前者は個人的規定性にかかわる一貫性基準であり、後者は社会的規定性にかかわる一貫性基準である。

この2つの一貫性原理は、相互に矛盾した要請である。このような矛盾は塩原勉の言を借りれば、「個人が環境に適応しつつ自己の有意味な同一性 (identity) を保つ発達体である以上、けっして逸れることのできない矛盾である」²⁰⁾とすることができる。つまり、環境に対する自己の同一性を保とうとすれば、状況に対し選択的意味づけにより自己を一貫させる必要がある。それは、個別的状況を超えた一貫したパターンを持つことである。しかし、他方では、個人は環境に対して適応して行かなければならぬ。状況は、個人に対してその都度、状況の論理に服することを求める。この状況からの一貫性は、個々の状況が、常にその状況に個人が同調することを一貫して要請するという意

味であり、塩原のように「状況適合の原理」と言うことも出来る。

役割は、2つの規定因が背後に保持する2つの一貫性原理の矛盾に媒介されて、具体的に構成される。従って個々の役割の具体的なあり方は、それを放棄しては役割を構成しない中心軸(中枢的属性)を中核として多様なバリエーションがあって不思議ではない。そのバリエーションの可能な程度は、社会的規定性の程度と個人的規定性の能力、資格、志向等に依存している²¹⁾。ただ社会的規定性に依存する役割の属性は、その系列に序列があり、それなくしては役割を構成しない中枢的属性 (pirotal attributes) から、それを欠いたり変更したら関連する他者からのサンクションを被る関連的属性 (relevant attributes), それにその属性を取得するか否か、ほとんど個人的選択意思にまかされている任意的属性 (optinal attributes)²²⁾までである。

例えば、医者が患者の治療をすることは、医者の役割を構成する上で欠くことの出来ない中枢的属性かもしれないし、それに伴って患者のカルテを書くことも付随した属性 (関連的属性) かもしれないが、医者が深夜まで医学雑誌を読み、新しい研究や治療の成果に目を通すことは、多分に任意的属性であろう。従って具体的な役割の在り方のバリエーションは、中枢的属性ではほとんど見られず、関連的属性、任意的属性になる程大きくなるということが出来る。

3. 役割の構成する諸要素

次に、役割を構成する諸要素について考察しよう。役割は具体的には行動の中に現わされるが、役割を構成するために動員されるのは行動だけではない。単一役割を統一的に構成する諸要素を、5つに分けて考察してみよう²³⁾。

役割を構成するために必要不可欠な要素は、具体的に観察される行動である。それは先に見てきたように、役割が行動特性の特定化をその概念のベースにもっているのが当然かもしれない。従って詳しく説明する必要もない。ただ、有意味な一貫した行動パターンとしてグルーピングする基準は、行為者個

人の側にもあるし、関連する他者や集団の側にもある。「役割交渉過程」を経、この両基準は具体的な妥協点を見出し、現実の役割が構成され、実現されることになる。しかし、客観的に役割交渉過程の難易さに関連して、具体的な行動の仕方が、社会的に前もって厳密に規定されている場合もあれば、役割交渉過程で容易に個人的規定にゆだねられる役割もある。

先程見てきた観閲式での軍隊の行進は、その動作の仕方が厳密に規定されている例であろう。レストランのウェイトレスの役割の例では、服装や態度、言葉づかいなどが厳密に規定されている場合と、そうでない場合がある。客からの注文を聞き、調理場に伝え調理された食事を客に出すという基本的な行動属性は、ウェイトレスという役割の中核的属性であるが、その具体的な動作への規定度は、高級レストランのそれと、街角の食堂のそれとでは明らかに異なる。行動の細目にわたる規定が前もって形成されている場合には、役割交渉過程によって、個人が選択的創造的に役割を取得し得る可能性は、非常に難しくなる。反対に、行動の細目にわたる規定が前もって形成されしていない場合には、役割交渉過程によって、個人が選択的創造的に役割を取得し、実現し得る可能性は、非常に易しくなる。

役割を表現する場合に求められるのが具体的動作だけの場合がある。ベルトコンベアーの前に立って部品を組み立てるだけの作業に従事している工員の役割は、その部品を組み立てるための具体的動作だけが期待され、その速さが、ベルトコンベアーの速度によって規定されている。役割を具体的動作だけで表現されるなら、こうした役割はいずれ自動機械（工業用ロボット）に置き換えられるかもしれない。しかし、動作や言葉の背後に、その役割を表現するための感情的要素が要請される場合がある。特に友人の役割の表現の中には、この感情的要素が重視される場合が多いし、役者の役割には、感情的要素の動員が必要である。与えられた役柄を演ずる際、自から選択的にどのような情緒的要素をどの程度折り込んで、その役柄を言葉や動作を通して表現できるかは、その役者の上手、下手を決める重要な要素となる。役者の場合、その感情表現の仕方は、かなり役者の個人的資質や能力に依存するが、その表現の仕方が社会

的にあらかじめ規定されている役割もある。デパートのエレベーターガール、スチュワーデス、会社の受付嬢などの表情を伴う役割には、感情の表現の仕方があらかじめ規定されている部類に属するであろう。

役割を構成する諸要素には、行動、感情の他に、状況に応じてどのように行動や感情を表現すべきかを規定している規範がある。この場合の規範は、個人的規範と社会的規範の両方を含んでいる。行動や感情表現自体も、標準化された規則性を有しているので、それ自体が規範の1部を成しているとも見ることが出来る。ここでの規範は、それらの行動や感情表現の系列全体に関連した規則性や標準性、その *frame of reference* を意味していると共に、それに対する評価的側面を含んでいる。

役割は他者関連的性格を有しており、相互作用過程における役割の実現の為には、この関連する他者役割に関する知識が必要である。野球のピッチャーは、キャッチャーや他の内野手や外野手の役割に熟知していなければならないし、打者の役割も知らねば、野球ゲームの中で、自からの役割を十全に表現することは出来ない。野球ゲームにおけるルールや他者役割に関する知識は、この場合の規範を形成している。社会的規範からの逸脱には、その役割行動系列の必須度に応じて強弱のサンクションが加えられる。個人的規範からの逸脱には、強弱の自責の念にかられる。これは規範自体具体的行動系列に望ましさの基準を持っているからであり、評価的側面を含んでいるからである。野球選手の役割は、チームプレーの中で実現されるため、規範はあらかじめ社会的に規定されている場合がほとんどであるが、小説家の場合には、個々の行動系列の組み合わせ方は、個人的規定にゆだねられている。ある作家は、取材活動をもっぱら文献をたよりにするかもしれないし、自分の足で歩くかもしれない。文章化する作業も自分で書くのか、口述筆記を頼むのか、それら諸々の行動系列の組み合わせ方は、各人各様であろう。それが個人的規範として確立している場合もあれば、そうでない場合もある。規範が役割の構成に欠くべからざる要素であるか否かは、役割の制度化の程度に依存している。

役割はまた、目的的性格を有している。目的が具体的な1組の行動の反復性

の中で完結するような役割もあれば、多くの行動系列や感情表現、あるいはそれら全体を組織する規範を動員して、実現をめざすような目標を持つ役割もある。先の組み立て工員の役割は、反復的行動の中に役割の目的が包含されている例であるが、自動車のセールスマンの役割は、自動車をより多く売ることを目的としており、そのためにより多くの行動系列や感情表現がそれぞれの状況により適合した形で組み合わせられていなければならない。従って目標は、これまでの3つの要素をどのように組み合わせ、いかに目標に接近するかという方法、手段系列とそれに対する配分の計画性が付随する。

目標も又、個人的規定性にゆだねられる場合もあれば、社会的規定性にゆだねられる場合もある。また、目標が明確な具体性を持つ役割と抽象的レベルにとどまる役割がある。セールスマンの例では、具体性を持って社会的に規定されている場合であるが、学者の役割は、学問研究をすること以外に、社会的規定があまりされていない場合があるし²⁴⁾、その目標は、その個人によって、いつ達成されるかわからないような深遠な抽象的レベルで設定されているかもしれない。しかし、その場合でもおそらく、下位目標が設定されている場合が多いであろう。

役割を構成する最後の要素は価値である。価値は、役割行動の目的を一般化して規定し方向づける要素である。換言すれば、具体的な目標設定の指針を用意するものが、この場合の価値である。自動車会社のセールスマンは、具体的目標を自動車の売り上げに求めるが、この自動車をより多く売ること、つまり目標の選択についての望ましさの基準となるのが価値である。従って自社製品の優秀性に対する信念が、この目標を選択する根拠を成している場合もある。芸術家は、価値の表現として作品の創造という目標を達成するために自からの役割を取得し、構成し、実現しようと努めているのかもしれない。この場合の価値が、社会的に共有されたものか、個人的に規定されたものかは、個々に異なる。しかし、個人的価値——これも社会的背景のもとで形成されるが——に忠実であろうとすれば、個人的にはより充実したものになるであろうが、社会的評価は得られず、社会的価値により迎合した形で作品を仕上げれば、社

会的評価は獲得できるが、個人的にはむなしさが残る場合がある。

役割の表現に動員される価値が、個人の内面に依拠するのか、関連する他者に共有された信念に依拠するのかで明らかに異なってくる。価値は最も一貫性を要求するものであり、価値が動員されるような役割場面では、個人的一貫性と状況的一貫性が最も鋭く対決をせまられることになる。

以上、5つに分けて役割を構成する諸要素を考察してきたが、これは行動レベルから価値レベルへ層化して考えることも出来る。ある社会集団は、その集団個有の価値を持ち、そして集団は具体的目標を定め、集団成員に共有化された規範の体系を形成する。集団成員は、その成員特有の感情表現の仕方を発達させ、具体的行動を遂行する。集団成員に配分された役割を取得するため、新しい成員は、具体的な行動系列を学習し、既成員との交流によって特有の感情表現の仕方を取得する。集団への所属性が高まると共に、規範や目標を取得し、さらに価値を内面化することによって、その集団の最も十全な成員としての地位を獲得する。しかし、自我が十分に発達した個人は、そのパーソナリティ体系に特有の価値、目標、規範、感情、行動のセットを持っており、個人がどのレベルで役割を取得するか、それが社会的に規定された役割（期待）のどのレベルで結合しているかによって、具体的な役割の表現は異なってくる。

期待 レベル 取得 レベル	価値	目標	規範	感情	行動
価値	一致	+	++	+++	++++
目標	—	一致	+	++	+++
規範	---	—	一致	+	++
感情	----	---	—	一致	+
行動	-----	----	---	—	一致

図2 期待レベルと取得レベルの関係図

図2は、このような期待レベルと取得レベルの関係を現わしたものである。

両レベルが一致している場合もあれば、不一致の場合もある。不一致は、取得レベルが期待レベルを上廻る場合（図2では+表示）と、取得レベルが期待レベルを下廻る場合表示がある。取得レベルが上廻る場合には、役割は個人的規定性を強め、主体的創造的な役割を表現することになる。反対に取得レベルが下廻る場合は、社会的規定性を強め、形式的儀礼的な役割を表現し、ひいては役割名目化に連らなることになる。但し、ここで期待レベルと取得レベルが一致するという事は、レベル間の一致を示すだけで、その内容について一致することを指しているのではないことに注意する必要がある。価値内容、目標の選択、規範の設定、感情や行動の仕方それぞれについて、個人的規定と社会的規定に差異があることは当然予想されることである。

社会的に規定された役割に期待されるレベルが、役割によって異なるという議論の中には、各レベルへの期待の強度配分が、各々の役割によって差異があることも示している。同じ会社組織でも、目標レベルでの役割期待の強い会社、職場、地位もあれば、行動レベルでの期待の強い会社、職場、地位もある。また、会社の有り方、一般的方針、理念に強い同調を求め、具体的目標は、その価値への合致の結果、論理的必然的に導き出されるものとして、以下のレベルでの細目の規定を最少限にとどめようと試みる会社もある。これは極めてユニークな会社と言うべきであろう²⁵⁾が、組織を柔構造化して、環境適応力を高め従業員の役割資源を最大限発揮させ、役割体系を創発的体系として維持、発展させていくためには、価値や一般的目標への一体感を強化し、それらの価値や目標の表現として、個々人が役割を創造的に形成出来るよう準備するのは当然である。しかし、このような役割規定が十分に本来の機能を発揮するためには、個人的資質や能力の他に、個々人の役割形成の相互作用過程でのチェック可能な成員数を有する集団規模でなければならないであろう。

社会的に規定された役割期待の強度は、役割交渉過程で行為者が彼の自我を動員して、どれ程役割形成的取得が可能か、その選択と修正の可能性に関連する。もちろん、行為者自身の役割交渉能力や役割取得能力も重要な要因であるし、行為者自身の志向性やその強さが関連する。これは単一役割との関係だけ

で論じられる問題ではない。役割群 (role set) や多数役割 (multiple roles) を同時に論じなければならないだろう。

具体的な役割期待の強さに関して、Dahrendorf が「社会的義務期待」(Muß-Erwartung)、「道義的義務期待」(Soll-Erwartung)、「可能期待」(Kann-Erwartung) の3種に分けて考察した例が思い出される²⁶⁾。社会的義務期待は、最も強い期待であり、その拘束力はほとんど絶対的な強制命令である場合をさしている。この期待からの逸脱には法的制裁を覚悟しなければならない。道義的義務期待は、その強制的拘束力においては社会的義務期待とほとんど変わらないが、この期待からの逸脱には当該社会から追放、懲罰、昇進延期等を覚悟しなければならない。言わば、準一法的な内的な制裁である。それに対して可能期待は、その正確な内容やサンクションを明確にすることは難かしいが、その期待に応ずる場合には、肯定的なサンクションが与えられ期待に反する場合には、否定的なサンクションが加えられるので、必ずしも恣意的に選択できるものではない。(図3参照)

期待の種類	サンクションの種類		行 動 例
	肯 定 的	否 定 的	
社 会 的 義 務 期 待	—	法による罰	財政上の正直な振舞い
道 義 的 義 務 期 待	(人 気)	社会的追放	クラブの会合への積極的参加
可 能 期 待	尊 敬	(不人気)	資金を自発的に集めること

図3 Ralf Dahrendorf 橋本訳『ホモ・ソシオロジクス』

ミネルヴァ書房 1973 p.55より

Dahrendorf の役割期待の強さに関する分類は、彼の社会的役割概念の特徴と共にきわめて強い法的色彩をおびたものになっている。拘束性の強度は、法的あるいは準法的立言の程度より、相互作用過程の中での他者からの期待の強度に重点がおかれるべきであろう²⁷⁾。この点、「規範の実現に対する傍観者の

期待」²⁸⁾の強さの程度を同じく3分類した清水盛光の所説の方が参考になろう。清水の期待の分類は次のように要約できよう²⁹⁾。

- (1) 「命令的期待」——これは集団生活に対して最も重要性をもつ規範であり、その多くが「従うべし」とする命令の形をとる。
- (2) 「奨励的期待」——これは規範実現への強い期待を持ちながら、その実現への期待は、願望の表示、勧告あるいは奨励の程度にとどまる。
- (3) 「放任的期待」——これは最も弱い期待であり、規範実現へ傍観者は何ほどの関心を、意識的にしろ、無意識的にしろ持っているという程度の期待であり、その期待に反した場合、何らかの制裁の原因になるものでなければならないが、上記2者に対して相対的に弱いものとなる。

社会的に規定された役割の期待の強さは、程度の差であり、連続的である。従って、ここにあげた3つの類型化の中間段階があって不思議ではない。さらに清水の場合には、Dahrendorfとは異なり、期待の強さの3種類の分類を事前の期待に依拠して行ない、結果からする制裁は含んでいない。しかし事前の強制と結果への制裁の強さは何程かの連関がなければ、制度の維持は困難になるろう。

清水は規範の実現に対する傍観者の期待から3種類の期待を分類したのであるが、そこには期待の強弱の程度と共に「行為の外面的な様式」³⁰⁾と「行為を規定すべき内面的な動機や態度」³¹⁾にも言及しており、これは「期待の対象」³¹⁾と見ることが出来る。具体的な役割を構成しているのは、外面的な行為の様式だけでなく、内面的な諸要素が含まれていることは、先の役割を構成する諸要素で見たような行動、感情、規範、目的、価値のレベルを成している。従って、このような「期待の対象」のタテの拡がり、その行動が役割属性の中で、中枢的か、関連的か、それとも周辺的かのヨコの拡がりに、期待の強さの程度は関連している。具体的に社会的役割の中で、この強度配分がどのように分散されているかは、詳細な観察の結果を待たねばならないが、推測し得ることは、当該社会集団への所属性が高まれば高まる程、その社会集団の有する価値や目標レベルでの一体感を強く期待されるだろうし、新前の成員に対しては

行動レベルの期待へ同調することを強く求められるであろう。また、中枢的属性であればある程、期待も強く、周辺の属性であればある程、期待の強さは、より「放任的期待」に近づくであろう。

おわりに

これまで、単一役割の構成に関して、役割と社会的役割、役割規定性の2つの契機、役割を構成する諸要素について若干の予備的考察を加えた。この考察の基本軸は、最初に述べた「生活体」—「役割」—「社会関係」軸であり、特に生活体としての行為者の「行為」と「社会関係」との間で、「役割」が実際の位置で構成されているのかを実証的に解明するための概念図式を得ることである。行為者の観点を十分に顧慮しながら考察を進めたつもりではあるが、その意図が十分に生かされなかった面がある。役割取得状況の分析は、生活体としての個人と役割との関係局面を論じることになり、自我過程に関する仮説³²⁾を前提にしなければならない。先に期待の強度について論じた所で、行為者の側の期待（準備）について論じなかったが、社会的役割からの期待の程度と、基本的には同じことが行為者の側についても言える。従って、社会的に規定された役割の構成の立体的構造は、行為者の側が観念的に規定する役割の構成の立体化にもつながる概念構造である。その2つの役割の規定がどのように関連するか、一部をレベル間関係で論じたが、その全体像は明らかにされていない。その為には、生活体個有の問題や社会関係個有の問題も射程に入れなければならない。例えば、自己同一性や権力関係の問題に入り込むことにもなる³³⁾。

<注>

- 1) 佐藤勉「役割分析の基本問題——ホモ・ソシオロジクスをめぐって——」『現代社会学』3(1975) pp. 101—107., 拙稿「役割分析と役割取得」『駒沢社会学研究』12(1980)

- 2) T. Parsons and N. Smelser, *Economy and Society. : a study in the integration of economic and social theory*, London, (1956). 富永健一訳『経済と社会 I, II』(1958) pp. 72—80参照。渡辺秀樹「個人・役割・社会——役割概念の統合をめざして——」『思想』686号(1981.8) pp. 103—104. 渡辺論文では、ここで述べたことと同様の主旨のことが詳しく述べられている。
- 3) R. H. Turner, "Role-Taking, Process versus Conformity", A. Rose (ed.), *Human Behavior and Social processes*, London, Roufledge & Kegan Paul, (1962) pp. 20—40. ターナーの役割形成論については拙稿前掲論文を参照のこと。
- 4) Ralf Dahrendorf, *Homo Sociologicus*, Westdeutscher Verlag, (1959) 橋本和幸訳『ホモ・ソシオロジクスー役割と自由』ミネルヴァ書房(1973) p. 14.
- 5) R. Dahrendorf, 。邦訳, 前掲 p. 14.
- 6) 田中義久『私生活主義批判』筑摩書房(1974) p. 167.
- 7) 森好夫『文化と社会的役割』恒星社厚生閣(1972) pp. 72—73.
- 8) S. F. Nadel, *The Theory of Social Structur*, London, Cohen & West (1957) 斎藤吉雄訳『社会構造の理論』恒星社厚生閣(1978) 40.
- 9) Nadel, 邦訳, 前掲 pp. 41—43.
- 10) Nadel 邦訳, 前掲 p. 45.
- 11) Nadel は, Linton のように「地位」の概念を改め導入することなく役割概念で統一しようとしている。斎藤吉雄「社会構造と役割理論」Nadel, 邦訳, 前掲所収を参照。
- 12) この事は A. Schutz が述べている。後述する Barger & Luckmann の役割制度化の議論は, この Schutz の明らかにした知見に負っている。Alfred Schutz, *Collected Papers II. Studies in Social Theory*, Martinus Nijhoff, The Hague (1976) p. 234.
- 13) 役割の他者関連的性格については, R. Turner は「役割相互性の原理 (principle of role reciprocity) として論じている。R. Turner op. cit. p. 23.
- 14) こうした役割概念については, 拙稿前掲論文を参照されたい。また先にあげた渡辺論文や森論文にもこの傾向が強く見られる。
- 15) Peter L. Berger and Thomas Luckmann, *The Social Construction of Reality—A Treatise in the Sociology of Knowledge*, New York (1966) 山口節郎訳『日常世界の構成——アイデンティティと社会の弁証法』新曜社(1977) p. 93.
- 16) Berger & Luckmann, 邦訳, 前掲。pp. 93—103.
- 17) Dahrendorf, 邦訳, 前掲 p. 46。
- 18) Berger & Luckmann, 邦訳, 前掲 p. 105。
- 19) Theodore M. Newcomb, Ralph H. Turner, Philip E. Converse, *Social Psychology: The Study of Human Interaction*, New York, Holt, Rinehart

- and Winston (1965) 古畑和彦訳『社会心理学——人間の相互作用の研究——』岩波書店 (1973) p. 374 ここでは Newcomb らが採用した図式を簡略化して使用した。
- 20) 塩原勉『組織と運動の理論——矛盾媒介過程の社会学』新曜社 (1976) p. 160.
- 21) この小論では、このバリエーションの具体的な考察まで論じることが出来ない。その理由については後述するが、ただ、その変数についての考察例は、先の渡辺論文でも取り上げられている。
- 22) この「中枢的屬性」(pivotal attributes), 「関連的屬性」(relevant attributes), 「任意的屬性」(optinal attributes), という区別は、Nadel に負うものである。Nadel, 邦訳, 前掲 pp. 52—53参照。
- 23) ここで単一役割の構成にかかわる5つの要素を考察するが、この諸要素は T. M. Mills が集団過程の諸次元として取り上げた5つの次元とほぼ一致している。また、T. Parsons & E. A. Shils らの行為理論や N. J. Smelser の集合行動の理論における行為の構成要素を想起させるかもしれないが、ここでは直接それらに言及するものではない。Theodore M. Mills *The Sociology of Small Groups*, New Jersey, Prentice-Hall (1967) 片岡徳雄, 森楸訳『小集団社会学』至誠堂 (1976). Talcott Parsons & Edward A. Shils (eds.), *Toward a General Theory of Action*, Harvard Univ. Press (1952) 永井道雄, 作田啓一, 橋本真訳『行為の総合理論をめざして』日本評論社 (1960). Neil J. Smelser, *Theory of Collective Behavior*, Routledge & Kegan Paul (1962) 会田彰, 木原孝訳『集合行動の理論』誠信書房 (1973).
- 24) ここで取り上げた「学者」の例は、純粹に学問研究に専念している場合であり、大学教師など兼ねている場合には教育上の諸々の役割が社会的に規定されていることは言うまでもなからう。
- 25) このような会社の例は、次の本が参考になろう。鎌田勝『超人間主義経営』産業労働調査所 (1977)。また筆者自身このような会社のいくつかを調査中でもある。以下の論述にはこの調査による知見も含まれている。
- 26) Dahrendorf, 邦訳, 前掲 pp. 51—58参照。
- 27) これらの点に関しては、J. Ritsert, や F. H. Tenbruck の批判に論及した森論文が参考になろう。森好夫, 前掲 p. 97参照。
- 28) 清水盛光『集団の一般理論』岩波書店 (1971) p. 371.
- 29) 清水, 前掲 p. 368—361。
- 30) 清水, 前掲 p. 370。
- 31) 森, 前掲 p. 99。
- 32) 自我過程に関する仮説を提示して運動論を展開した好例は、塩原勉である。塩原, 前掲pp. 156—170参照。

33) 自己同一性 (self identity) の概念を役割分析の中に取り入れ「役割同一性」 (role identity) の概念を提示した好例は山根常男に見られる。山根常男「家族の論理」垣内出版 (1972) pp. 409—412。また、役割関係を具体的に考察する場合見落してはならないのは、役割交渉過程における権力の差である。役割取得の自立性の度合は多くの場合、社会関係のネットワーク上の位置に付随する権力の差に基づいていると考えられる。同様の指摘は、渡辺前掲論文や森前掲書でもふれられている。